

教育実習（幼稚園）における指導計画を用いた保育実践 —本学幼児教育学科2年生の実習報告の分析から—

Childcare Practice Using Instructional Planning in Educational Practice (Kindergarten) -An Analysis of Practice Reports of Second Year Students in the Department of Early Childhood Education

佐々木千夏 ・ 藤本 愉 ・ 崔 敏奎 ・ 椎名澄子
Chinatsu SASAKI ・ Yu FUJIMOTO ・ MinGyu CHOI ・ Sumiko SHIINA

旭川市立大学短期大学部幼児教育学科

Abstract

This study will organize and analyze the contents of the "advice collection for juniors" filled out by trainees after their practical training, and ascertain the status and trends of recent educational training (kindergarten), mainly from the perspective of childcare practice using instructional plans. Based on this, we will examine the future direction of training plans and practice guidance for educational practice (kindergarten) at our university.

要旨

本研究は、実習生が実習後に記入する「後輩へのアドバイス集」の内容を整理・分析し、近年の教育実習（幼稚園）の状況や傾向について、主に指導計画を用いた保育実践という視点から把握する。その上で、本学における今後の教育実習（幼稚園）の実習計画や実習指導の方向性について検討を行う。

1. はじめに

本稿の目的は、幼児教育学科の学外実習科目である教育実習（幼稚園）において各学生が経験する内容について、学生たちが実習後に記入する「後輩へのアドバイス集」の内容を整理・分析することからその傾向をつかみ、今後の実習計画の作成や、実習指導の内容の再検討のための示唆を得ることにある。その際、とくに実習園によって内容や回数にばらつきのある参加実習や指導実習（指導計画を用いた保育実践）に焦点を当て、本学科が定める実習計画をより具体性をもった内容にまで高めていくことを目指す。

幼児教育学科実習委員会では、本学科の学外実習（および実習指導）を複数の教員で担当し、

全教員が分担する形での実習訪問指導、定期的な実習委員会の開催や学科会議での情報共有を図りながら、全教員での学生指導という体制を十数年前から築き上げてきた。しかし、個別の学生の实習状況を議論することはあっても、実習園全体の動向把握や情報の整理は積極的に行ってこなかった。というのは、幼稚園実習は各学生が自宅（あるいは実家）から最寄りの場所で行うことを基本としているため、実習先となる園は年度ごとに偏りやばらつきがある。毎年のように実習生を依頼する園もあれば、数年ぶりに依頼する園もある状況下で、各園での具体的な実習内容についてつまびらかに把握するには限界があり、さらにその蓄積を利用する必要性は議論されてこなかった。

しかしながら、学生たちが後輩に伝えるための「アドバイス集」を概観すると、各園での実習状況が具体性をもって集約されており、ここから幼稚園実習の状況や経年変化などを把握し、今後の実習委員会の資料とすることの意義は少なくない。今年度、本学が公立化したことにより、幼児教育学科の実習指導や学外実習の体制も見直しを図り、現在の社会状況に合わせながら、より効率的な教育課程のあり方を模索し、議論している最中でもある。

そこで本稿では、過去の教育実習における「後輩へのアドバイス集」を基にして、本学の教育実習（幼稚園）におけるこれまでの状況を整理し、今後の運営に向けた資料作りを行う。

2. 使用するデータと学生の傾向

参考とする「後輩へのアドバイス集」とは、本学幼児教育学科2年生が前期末（夏季休暇中）に行う3週間の教育実習（幼稚園）に関して、各園に特有の準備物や決まりごと、実習中に経験した手遊びや歌などの保育技術、設定保育を行う際の指導計画の準備と実践等を後輩に向けて、参考資料の形で残している紙媒体の資料である。本学ではこうした「アドバイス集」を2013年度から作成しており、2019年度以降、フォーマットを統一している。本稿ではここ数年の変化を確認するために、2019年度、2021年度、2023年度の3年分の2年生を分析対象とする。各年度の資料数などは表1のとおりである。学生の入学者数には毎年変動があるため、各年度の資料数にもばらつきがある。

表1 分析する「後輩へのアドバイス集」

	実習園数（園）	データ回収数（人）	履修学生数（人）	全学生数※（人）
2019年度	32	57	58	61
2021年度	47	69	74	78
2023年度	37	46	48	55

※各年度5月1日現在。教育実習開講時期の学生数とはずれがある。

履修学生数と全学生数の関係からもわかるように、本学の傾向として、ほぼすべての学生が教育実習を履修する。今年度（2023年度）になって、教育実習を履修しない者が初めて1割に近づきつつあり（55名中7名が未履修）、1年次の早い段階で進路を見極める学生が増えてきた

という兆しがある。また、この3年においては履修したほぼすべての学生が幼稚園教諭2種免許を取得しており、評価の個人差はありながらも、以下で分析するのは教育実習を乗り越えた学生たちのデータである¹。ちなみに実習評価は表2のような傾向となっている。

表2 実習評価（総合評価）の内訳

単位：人（％）

	評価2以下	評価3	評価4	評価5	平均値	計
2019年度	2 (3.6)	27 (48.2)	15 (26.8)	12 (21.4)	3.6	56 (100.0)
2021年度	2 (2.7)	26 (35.1)	28 (37.8)	18 (24.3)	3.8	74 (100.0)
2023年度	6 (12.8)	16 (34.0)	16 (34.0)	9 (19.1)	3.6	47 (100.0)

1 本学では各実習園からの実習評価が1の場合、単位認定はしない（成績評価「不可」）という実習規程がある。その後、再実習をするパターンもあるが、表1で示したデータはどの年度も各学生の初回の教育実習のデータであり、この中から再実習をした者を除いた。この3年の中で、再実習となった学生はごくわずかにいるため、特定を避けるために表2では実習評価2以下をまとめた。

教育実習（幼稚園）における指導計画を用いた保育実践
—本学幼児教育学科2年生の実習報告の分析から—

本学において教育実習（幼稚園）は2年次に実施する最後の実習であり、保育実習をすべて終え、2年間の集大成としての発展的・応用的な実習という位置づけとなっている。各園からの実習評価は、保育実習よりもやや厳しさのある所見も目立っている。

3. 幼稚園実習における参加実習の実態

はじめに、3週間の幼稚園実習の中でどういった活動や遊びを経験しているのか、各年度の集計から確認してみよう。ここで挙げる活動や遊びの内容は、小櫃ほか（2017 = 2023）を参考にアンケートの項目を作成した。

表3 実習中に経験したこと（複数回答） 単位：人（%）

	2019年度	2021年度	2023年度
読み聞かせ	56 (98.2)	58 (84.1)	42 (91.3)
ピアノ	51 (89.5)	58 (84.1)	39 (84.8)
紙芝居	24 (42.1)	42 (60.9)	19 (41.3)
パネルシアター	11 (19.3)	15 (21.7)	6 (13.0)
エプロンシアター	10 (17.5)	9 (13.0)	9 (19.6)
わらべうた	4 (7.0)	0 (0.0)	2 (4.3)
素話	3 (5.3)	2 (2.9)	1 (2.2)
園バス乗車	20 (35.1)	0 (0.0)	20 (43.5)
その他※	0 (0.0)	7 (10.1)	3 (6.5)
データ計	57 (100.0)	69 (100.0)	46 (100.0)

※ペープサート、クイズ、スケッチブックシアター、手袋シアター、紙皿シアターという回答があった。

表3から、絵本の読み聞かせはほぼ9割、ピアノ演奏に関しても毎年8割以上の学生が経験していることがわかる。本学では絵本にまつわる内容や読み聞かせの技術指導は複数の授業（保育内容演習（言葉）、保育・教育実習指導、演習Ⅰ・Ⅱ等）でカバーしている状況であり、単一の絵本に関する講義や演習があるわけではないものの、引き続き実習前に子どもの絵本に触れ、読み聞かせの技法を学んだり、実際に練習したりする機会が求められていると言えよう。

ピアノに関しては、保育所実習と比べ幼稚園においてはほとんどすべての園で日常的に弾く機会があり、実習生にも朝の会、帰りの会での伴奏や歌遊びが求められている。本学では音楽Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの授業でピアノの個別指導が行われているが、それとは別に実習前にはオリエンテ

ーションで配付された楽譜をもとに、園独自の曲を練習する姿もしばしばみられる。

紙芝居、パネルシアター、エプロンシアターについては、本学では図画工作や保育・教育実習指導、演習Ⅰの授業と連携をし、学生が自らのオリジナル作品を作り、各実習で使える保育技術となるような指導を行っている²。しかしこのうち、紙芝居だけが4～6割と突出して経験されているのは、各幼稚園で所蔵している紙芝居を演じる機会も多いからであろう。絵本に次いで、紙芝居は幼稚園の現場において親しみのある児童文化財のようであり、実習事前指導においても触れておく必要がある。

わらべうた、素話に関しては、旭川市内（あるいは市外）において非常に数は少ないものの、一部の園で日常的に用いられており、実習事前

2 パネルシアターは1年前期末から夏休みにかけて、紙芝居は1年次冬休み、エプロンシアターは1年次春休み中の課題として取り組むことになっている。

指導内でも特別講師を招いた授業を行っている。多くの学生が実習で経験することはなくとも、保育技術のひとつとして学生時代に触れておくことは有意義であろう。

最後に幼稚園実習においては、子どもたちがバスで登園・降園する際に一緒にバスに乗り込むことも3～4割の学生が経験している³。旭川市内では幼稚園バスを所有している園のほうが多数派であるため、こうした送迎時の業務の学びにも意味があろう。

4. 幼稚園実習における指導実習

次に、指導実習、つまり指導計画を用いた設定保育に関して、全体の傾向を確認していこう。本学ではこれまで、各実習園に対して指導実習の回数に関する要望は具体的には挙げず、各園の実習指導者に一任してきた。そういったことにも起因しているのか、指導実習の回数に関して各園でかなりの差がある（表4、表5）。

表4 指導案を用いた部分実習の回数

単位：人

	2019年度	2021年度	2023年度
1回	14	38	17
2回	13	9	8
3回	9	4	9
4回	7	5	2
5回以上	12	7	4
なし	0	5	6

表5 指導案を用いた全日（一日）実習の有無

単位：人（％）

	2019年度	2021年度	2023年度
あり	47 (82.5)	46 (66.7)	42 (91.3)
なし	6 (10.5)	21 (28.4)	4 (8.3)

注：各年度、無回答者の表記は省いた。

部分実習は1回という園がもっとも多いため、部分実習1回、全日（一日）実習1回という形がスタンダードではありそうである。部分実習が「なし」という園も少数存在しているけれども、実習の申し合わせとして指導実習自体がないということは想定しにくい。そのため、そういった園は全日実習が1回のみというパターンである。部分実習が複数回で、全日実習がないという園もあろう。2019年度は5回以上部分実習を経験した学生が12人おり、中には13回、14回という学生もいる（各1人）。つまり、ほぼ毎日指導計画を作り、実習を行っているということになる。コロナ禍の2021年度を経て、5回以上部分実習を行う園は減っているため、コロナを機に実習のあり方を見直す園も増えているように思われる⁴。全体的に指導実習の回数は減ってきていると見て取ることができ、学生の目線で言えば実習中の負担が緩和していると言えるかもしれない。指導実習を行うということは、事前に準備した指導計画をあらかじめ決められた日に提出をし、何度かのやり取りを経て推敲し、当日を迎えることとなる。こうした流れに乗れない学生（提出期限を守れない、オリエンテーション時から指導案についての打ち合わせを実習指導者と始められず、実習中にしわ寄せがきてしまう、実習中に指導案を作り変えることになったものの、別案を考えておらずゼロから考え始めることになる、等）は実習中にかなり苦労することになり、結果的に実習評価を大きく減点することもある。その意味では、こうしたデータも用いながら実習事前指導において指導実習を含む教育実習をイメージさせ、指導計画の準備をサポートしていく必要があるだろう。

ちなみに、全日（一日）実習について各園での呼び方を集計したところ、表6のように多様であることもわかった。

3 なお、2021年度は新型コロナウイルス流行の只中にあり、どの園でも園バスの乗車がなかった。

4 なお、2023年5月にコロナが5類以降し、2023年度の実習はコロナによる制限はほとんどない時期（8月）に実施されている。

教育実習（幼稚園）における指導計画を用いた保育実践
—本学幼児教育学科2年生の実習報告の分析から—

表6 全日（一日）実習の呼び方 単位：人

	2019年度	2021年度	2023年度
全日実習	7	17	9
一日実習	15	8	10
完全実習	9	10	10
責任実習	8	5	4
研究保育	8	2	3
その他※	0	4	6

※評価実習、（一日）設定保育、公開保育、部分保育、およびそれらの組み合わせ（全日実習・公開保育等）がある。

5. 指導計画作成の際の決まりごと

では、各園ではどのように指導計画の作成を指導しているのだろうか。教育実習の前に、学生たちは授業の中で指導案を2～3つ作成しており、さらにそれ以外に個人的にいくつか作成するように指導している。表7では、指導案を作成する際のルールを問うたものをまとめた。ざっくりばらんに回答があったため、指導案が

「①細案」である場合、「②細案ではない」場合、「③その他のルール」の3つに分類してみた。

実習事前指導では、子どもの姿を想像し尽くし、いかに当日の設定保育を想像できるかという部分を重視しているため、細案で作成することを基本としている。全体の傾向としても、「短大の指導と同じルールで」、「細案で書く」というケースが優勢である。しかし、その逆となる「細案ではなく全日も1～2枚」という園もいくつか存在するため、細案ではない指導計画の書き方も授業内で紹介していく必要がある。指導計画の説明や実際の作成を複数の授業で行っているが（保育内容総論Ⅰ、保育内容演習（身体表現Ⅰ）、教育・保育課程論、保育者論、保育・教育実習指導）、各学生の指導案を細かく添削し、修正していくというやり取りには授業内では限界がある。今後、保育・教育実習指導の中でより手厚く個別の指導を行う計画を立てているところである。

表7 指導案作成の際のルールなど（2019年度、複数回答）

①細案	<ul style="list-style-type: none"> ・細案で書く（10人） ・実習生や子どもの発話等のセリフまで書く（2人） ・セリフは正しい言葉遣いで書く（1人） ・配慮事項を細かく書く（1人） ・設定理由を明記する（1人） ・短大の指導と同じルールで（5人）
②非細案	<ul style="list-style-type: none"> ・細案ではなく全日も1～2枚（3人） ・手遊びの図は書かない（1人） ・予想される子どもの姿は書かない（1人） ・セリフは書かない（1人） ・細案でもそうでなくても好きな書き方で（1人）
③その他	<ul style="list-style-type: none"> ・必ずコピーを取り手元に残す（1人） ・保育後、実録を赤ペンで作成する（1人） ・園で準備される指導案の用紙を使う（10人） ・短大の指導案の用紙を使う（4人） ・（消せない）ボールペンで書く（5人） ・最終提出の際にボールペン書きをする（4人） ・研究保育のみボールペン書きをする（1人） ・ペン書きは不要（1人） ・手書きではなくワードで作成する（5人）

6. 指導計画を用いた保育実践の振り返り

つづいて「幼稚園実習における指導案への向き合い方を振り返り、事前準備（良かった点・不足していた点）、実習期間中に大変だったこと」に関する自由記述の回答の分析を行う。自由記述の内容は、大きく①実習の「事前準備」に関するもの、②保育技術としての「ピアノ・製作（制作）」に関するもの、③実習を展開する上で求められる「子ども達の姿」の理解に関するもの、④指導案の「訂正・書き直し」に関するもの、⑤実習期間を通しての「実習指導者とのやりとり」に関するものに分類された。以上の5つのカテゴリーに基づいて、それぞれ詳細に内容の分析をする。なお、この5つのカテゴリーを複数含む回答が存在するが（例「事前準備における子どもの姿の想定不足」など）、便宜上、カテゴリーごとに基づいた分析と考察を行う。

1) 実習の「事前準備」に関するもの

肯定的な評価と否定的な評価を伴った記述に大きく分類された。肯定的な評価を伴ったものとして、「事前準備で必要なものなどはしっかりと用意できていたので良かった」「事前準備を早くしておくことで、スムーズに進めることができました」「オリエンテーションの日に指導案を提出するので、実習がはじまる前に事前準備にとりかかることができた点は良かったと思います」「事前準備では、早めに制作に必要なものを用意していたため、実習中でもあわてることなく修正をできた」などの回答があげられた。これらの回答は、部分実習や全日実習における設定保育を、前もって段取りよく準備をしておくことの重要性について触れている。一方、否定的な評価を伴う回答は、「もう少し早めに準備し、たくさんの指導案を書くべきであった」「指導案を書くことに時間がかかり、提出ギリギリになってしまったので、実習前から具体的な内容まで考えておくべきだった」「制作物の準備はしていたが、遊びの事前準備は足りなかった」「事前準備（材料の予備）が足りてなかったこと」など、指導案の作成と、設定保育の準備について言及したものに大別された。実習の

事前指導を通じ、事前準備を可能な限り進めておくことによって、余裕をもって実習を展開できるということは常々学生に伝えているが、事前準備が不十分なまま実習に臨んでいる学生が少なからずいる実情が浮かび上がった。

2) 保育技術としての「ピアノ・制作（製作）」に関するもの

特にピアノの演奏とその準備に関する回答が多かった。具体的には「ピアノがあまりできなかったことがあったので、前もってさらに練習すればよかったと思っています」「ピアノの練習が不足していたためもっと練習しておく」「ピアノは普段弾けていても実際に弾くと子どもの歌声に合わせながらになるため、部分実習・全日実習の前に朝の会や帰りの会で弾く機会をもらう」などの記述があげられる。本学では近年、ピアノなどの鍵盤楽器の演奏が未経験の入学が増えているとともに、学生の演奏技量が年々低下してきていることがピアノレッスンの担当教員から指摘されるようになってきている。その中で学生がピアノ演奏への苦手意識をもたないような指導を行うようにしているが、中には、ピアノを弾くことが日々の実習を進める上で負担になっている様子が見え始める回答（例「日誌と指導案、ピアノの両立が大変だと感じた」「ピアノに専念し、子どもの姿を見ることができなかった」）もみられた。制作（製作）に関しては、「子ども一人ひとりの制作準備をする場合、何が必要か、当日はどのようにしておくのか、あらかじめ決めておくべきだと思った」「1日実習で行った制作遊びの事前準備が不足していた」「制作で使うもの全てに名前を書いておくべきだった」「制作物の試作確認をいろいろ考えるともっと良かった」など、設定保育で行う活動の事前準備に関わる回答や、「予想していた制作時間よりも長くかかってしまったが、時間を削ることなく調整し、遊ぶ時間も十分に取れたことが良かった」「思っていた以上に、子ども達が元気で、中々時間通りに進めることや制作が少し難しく上手くいかないことが多かった」など、実際の設定保育の展開について言及した回答があった。設定保育の内容を考

える際に、制作活動を選択する学生が相当数いる。しかし、「自分が得意だから」「好きだから」という理由で安易に制作活動を設定保育に取り入れるのではなく、試作などのしっかりとした事前準備が重要であること（例「制作物の試作確認をいろいろ考えるともっと良かった」「不足していた点は、研究保育が近くなった時に試作品がダメになってしまい、準備する材料が変更になった点。試作品をもっと早く作るべきだった」）がいくつかの回答から示唆される。

3) 実習を展開する上で求められる「子ども達の姿」の理解に関するもの

実際に実習を進める中で、想像していた以上に現実の「子ども達の姿」に即した指導が求められるということを強調する回答が多かった（例「子どもの姿をたくさん予想し臨んだので、子どもの反応に対応しやすかった」「子どもたちの姿を事前に見ていながらも、そのクラスにあった指導案を作成することができなかった。もっと想像力を働かせて、子どもの言動を考えられたら良かった」「紙コップ鉄砲の的が多すぎてしまったり、打つ順番が不十分な所があったため、より事前準備の段階で子どもの姿を予想して行えると良かったと思います」「子どもの姿の予想があまり出来ていなかった。子どもが集中しているときの声掛けが足りなかった」「子どもの姿の想像が足りず、本番対応しきれない部分があった」）。「子ども理解」は、近年、保育者養成のカリキュラムにおいて強調されるようになってきている視点である。また本学でも「子ども理解」を促進するような指導を講義や実習指導を通じて行っているが、実際の「子ども達の姿」を観察し、それに基づいた「子ども理解」の経験が不足している状態で学生が実習に臨んでいることがこれらの回答からうかがえた。ただし、幼稚園実習を経験した学生に半構造化インタビューを実施した谷川（2010）が指摘しているように、実習を通して、予測と異なる子どもの反応があったり、自分の保育方法では実際の保育場面に対応できないなど、学生が自身の「子ども理解の不十分さ」を認識することは、決して否定的な側面ばかりではなく、より現実の

子ども達の姿に即した方向に「子ども理解」を發展させていく契機にもなりうる。また、学修の途上にある学生である以上、現場の保育者と比較して子ども達と関わる経験とそれに基づく多様な子ども理解の経験が不足しているのは当然のことであるが、その点を学内の事前指導でカバーするのは実際には困難であると同時に現実的ではないと思われる。したがって、実習場面においてその都度、新たな子ども理解の發展に繋げていく「反省的思考」（野尻・栗原 2006）を涵養し、促すような指導が、学内での事前指導だけではなく実習指導者にも求められるかもしれない。

4) 指導案の「訂正・書き直し」に関するもの

指導案については、実習指導のみならず専門科目全般において重点的に指導を行っているが、実習前と実習期間中いずれにおいても準備や作成に苦労した様子がうかがえた。事前指導などを通じて“余裕をもって指導案の準備をしておくように”という指導を行っており、そのことは学生たちもある程度理解した上で実習に取り組んだつもりだったが、実際に指導案の作成にあたって、予想した以上の準備が求められるとともに、不足している点の追加記述や書き直しが求められたとの回答が多かった（例「もっと丁寧に指導案をかけたと思う」「指導案に考えていた以上に足りなかったことが多く、書き直すのが大変だった」「指導案の数、訂正回数が多かったため、手書きだと間に合わなかったと思う」「指導案の書き直しが毎日のようにあったので、そこが一番大変でした」）。また、3)「子ども達の姿」の理解と関わるものとして、「実習が始まる前に指導案の提出が1回あり、子どもの姿が分からない状態で考えるのが大変だった」「指導案は子どもの姿をしっかりと予想できていなかったため、失敗に終わった。失敗した時の準備もできていなかった」「指導案では、もっと、子どもの予想される姿を考えておくべきだったと感じました」「子どもたちが活動しやすい環境設定ができていなかった」と思い、子どもの立場になって指導案を作る難しさを実感した」などの回答に示されているように、指導案の作

成は実際の子どもの姿を理解することと切り離せないものであるが、それが十分ではない状態であるため、リアリティをもった具体的な指導案をなかなか構想できていない様子が見られた。また、実際に実習に入って子ども達の姿を観察し、理解してから指導案を書き始める指導を行う実習園も相当数あり(例「指導案は担当クラスに入って一度体験してから書くということだったので、1週間前から書き始めました」)、3)でも述べたように、実際の「子ども達の姿」の観察による「子ども理解」の経験が、それに基づいた指導案の作成に追いついていない現状が浮かび上がる。ただし、この点についても4)で論じたように、ある種の「反省的思考」によって、ある程度までは対応可能になると考えられる。そのような学生の「反省的思考」を引き出す学内での事前指導のあり方については一考を要するだろう(野尻・栗原 2006)。

5) 実習期間を通しての「実習指導者とのやりとり」に関するもの

実習において、実習生と実習指導者とのコミュニケーションが適切かつ円滑な形で行われているかどうかは、実習の成果を大きく左右する要因であることは言うまでもない。特に設定保育の準備や指導案作成のプロセスで、実習生と実習指導者が頻繁に「相談」や「確認」という形でやりとりを行っていたとの回答が多くみられた(例「事前にいくつか部分実習の活動の案を大まかに考えていたことで実習初日に担任の先生に相談をし、早く活動を定めることができたことは良かったです」)担任と細かく指導案でも確認し、前日にはりハーサルも行い、当日は落ち着いてすることができた)担任の先生と3回ほどやり取りをしましたが、十分に準備することができました。事前準備では、机の配置を何度も相談し、当日は園児が使いやすく行うことができました)「不安なことはすぐに担任の先生に相談したため、何とかやり通すことができた」。一方で、実習指導者とのコミュニケーションが十分に取れていない場合もみられた(例「事前準備は余裕をもってできたが、園でどこまで準備していいのかなど担任との打ち合

わせが少し不足していた)「事前準備の際ブルーシートを用意したが、最初に実習で使うものは用意するものだと説明を受けていたがブルーシートは貸し出すことができた」と実習が終わってから担任の先生から告げられ、そういった面で担任の先生との連携がとれていなかった)。設定保育を含む責任実習の経験が圧倒的に不足しているため、不安を抱えながら実習に臨んでいる学生が多いが、可能な限り実習初期の段階で、実習指導者とのコミュニケーションを適切なタイミングで頻繁に行うことが、責任実習のみならず、実習を全般的に実りあるものにするのがうかがえる(例「事前に何をしたいのか考えていたので、早い段階で担任に相談することができた」)「指導案の提出は一回だけだったが、『時間が早く終わってしまう気がするから、何個か考えておいたり、流れをたくさん想像するといよいよ』とアドバイスをいただき、クラスの子どもの様子をたくさん考えることができました」)。

7. まとめ

以上、教育実習(幼稚園)における「後輩へのアドバイス集」の分析から、過去3年分の実習園の状況把握を目的に、学生たちが経験する実習の状況についてみてきた。途中で新型コロナウイルスの流行があったため、2021年度は部分実習の回数が少なく、実習評価の平均値も若干高いという傾向があったが、むしろこの年度が比較対象となり、2021年度と2023年度にみられたような教育実習のスタンダードなあり方が浮き彫りとなった。学生たちの振り返りをみると、教育実習において指導案の作成やそれを用いた保育実践がもっとも高いハードルであることは言うまでもない。ただし、指導する側にも難しさがあるという指摘(栗原・小林 2017: 139)は重要であり、各実習園に対して本学が実習事前準備としてどのようなことを丁寧に指導していくべきかということを考える材料はそろったのではないだろうか。この知見をもとに教育実習の実習計画を作成し、養成校である本学と各実習園との連携によって、保育者養成の質

向上を目指していく必要がある。

引用文献

- 1) 小櫃智子・守巧・佐藤恵・小山朝子（2017 = 2023）『改訂版 幼稚園・保育所・認定こども園実習 パーフェクトガイド』わかば社
- 2) 谷川夏実（2010）「幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容」『保育学研究』48巻2号、202-212.
- 3) 野尻裕子・栗原泰子（2006）「幼稚園教育実習における反省的思考について—実習日誌に記述した内容から—」『川村学園女子大学研究紀要』第17巻第2号、23-31.
- 4) 菜原桂子・小林美花（2017）「幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題」『北翔大学短期大学部研究紀要』第55号、139-145.

佐々木千夏 藤本 愉 崔 敏奎 椎名 澄子